

## 私の農村・大学・留学生活と学問の道 — 中日交流の考古学を志して

王 維坤（中国、西北大学国際文化交流学院教授・副院長）

ただいまご紹介にあずかりました王維坤と申します。中国・西安にある西北大学から参りました。4月から国際日本文化研究センターの外国人研究員および研究代表者として日本国内の有名な30名の研究者の方々に参加いただいて共同研究を主宰しています。私の能力に余ることですが、幸いなことに、研究ができる偉い先生方が揃っておられます。今日いらっしゃる橋本先生を始めとして、皆さんが後ろを支えてくださるので私は安心しております。早速、今日の話に入らせていただきますが、実は二つの内容があり、このテーマについて話すのは初めてです。橋本先生からこの講演のご依頼を受けた際、私の人生や学問の道をテーマとして話してみたらどうかと言われました。このことが、学生さんにとって参考になれば嬉しく存じます。

### 一、私の大学生生活

#### —500人の生産隊長として働く—

実は、私は何もかもゼロから始まりました。中国には文化大革命があったからです。年代から言うと1966年から1976年までの間です。今では高等学校を卒業して直接大学に入るのは普通のことですが、私の時代はそうではありませんでした。都市の若者、農村の若者は再び農村に行き再教育を受けなければなりません。私は田舎の出身ですので、1972年に高等学校を卒業して自分の生まれたところに戻りました。私の生まれたところは大変貧しいところです。今からいうと信じられないほど貧乏です。私の家族は9人です。働き手は父親だけでした。兄弟が7人います。彼らを養うのに、ずっと赤字でした。1952年以来、私が農村に戻った1972年までずっと赤字でした。借金は1000元くらいで、日本円にすると2万円くらいですが、問題は、当時の中国はとても貧しかったの

です。私は毎日良く働いたのに、収入は日本円で4円しかありませんでした。2万円を返すなんて、一生できません。そんな状態ですから、結婚もできず、一生独身のままかも知れないと思っていました。私の好きな女性は私のお嫁さんになるのは不可能でした。なぜかという、私に能力があっても、家計がとても貧しいですから、もし結婚すると一生苦しい生活を続けなといけません。ですから、そのころ私は恋人を作りませんでした。そのころ私は21歳で、今の若者に比べて、真っ暗な世界に暮らしていました。貧乏は貧乏ですが、逆に言えば、当時の私は貧乏な状態に不満で、それを变える決意と勇気がありました。ですから、農村の人々から推薦されて生産隊長になりました。500人くらいを率いて一生懸命働き、2年間で農村の様子がすっかり変わり、赤字ではなくなりました。毎年、私はかなりのお金を稼ぎました。村の人たちも豊かな生活を送れるようになりました。

### 二、私の大学生生活—考古学を専攻する—

そのころ文化大革命が終息に向かい、工・農・兵學員（工は工人、農は農民、兵は人民解放軍の士兵を指す）とって、優秀な人材が工場・農村・人民解放軍の各方面から推薦を受けて大学に入れる時代を迎えました。それは1974年10月4日のことでしたが、その日のことは一生忘れません。その日、農村各基層組織の推薦によって入学試験を受け、合格して西北大学に入学しました。ただ、その時代、大学に入って何を学ぶかを選択することは学生にはできませんでした。政府・国が学生を各学問分野に割り振るのです。政府・国が考古学を勉強しなさいなどと指定するのです。だから、当時、私は考古学がどういう学問であるかをあまり知りませんでした。このようにして、私は、専門である考古学をまさに1974年10月4日から勉強し始

めたのです。

私の人生は運命によっていろいろ変わりました。私から言わせていただくと、運命は実はチャンスです。チャンスは自分で作るものです。待つことではありません。チャンスを作るように自分から努力すると、いろいろなチャンスが得られるはずで、先ほど言いましたように、私は農村で大変貧しかったのですが、逆に言えば、それがあったからこそ、幸せになりました。私の子供は今生活がとても豊かですが、あまり努力をしません。私は大学に入学して以来、今も毎日夜中の2時まで仕事・勉強をしています。お金の問題ではなく、研究しないと新しいものが入って来ないからです。外国へ行くとか、自分の研究を進めるとか、できないかも知れません。ですから努力していろいろなチャンスをつかむことが大事なのです。私は初め農村の500人の生産隊長になりましたが、もし西北大学に行かなかったら、町の町長になっていただろうと思います。3000人くらいの長です。また、副県長とか県長になった可能性もあります。ですから、努力は大事なことだと思います。

### 1. 西北大学歴史系（現文博学院）考古学専攻での勉学——陳直先生による考古学の手ほどきと西北大学名誉教授張豈之先生との出会い——

大学に入って最も幸せだったことは陳直先生に会えたことです。陳直先生は、私が初めて考古学を学んだ恩師です。この先生は、『漢書新証』という中国の歴史の本を書かれました。古い『漢書』などを暗誦できるという噂をよく聞きますが、もちろん暗誦はできませんが、陳先生は『漢書』の中で、何がどこにあるか知り尽くしていらっしゃいました。私にとって先生の影響はとても大きいです。また、西北大学教授・清華大学教授の張豈之先生とお会いできたことも大きかったです。私の大学在学中にこの先生は学部長になり、その後学長になりました。この80年代、中国は外国との交流がまだまだ活発ではなかったのですが、この先生から日本への留学を勧められました。私たちの学部は将来、英語のできる先生や日本語のできる先生が欲しいとおっしゃいました。そのころ、京都大学の吉川忠夫先生——吉川幸次郎先生のご次男で、前の人文科学研究所の所長です——が西安にいらっしゃって、私が先生をずっとご案内しました。その先生がある日——1984年のことです——「あなたが日本語を勉強すれば、私が日本留学に招待します」とおっしゃい

ました。翌日からすぐに私はラジオで日本語を勉強し始めました。それまで日本語は全くできませんでした。私の日本語はすべてラジオから学んだものです。このように陳直先生・張豈之先生とお会いできた後、私は留学のチャンスを?みました。

### 2. 北京大学歴史系（現歴史学部）考古学専攻で研究生として研究に従事——宿白先生との出会い——

1977年に西北大学を卒業後、私は最も重要な時期に北京大学で研究生として2年間過ごしました。北京大学では2年間、宿白先生から毎週木曜日に2時間くらい指導していただきました。私は先生の修士学生・博士学生ではありませんでしたが、それよりも熱心に教えていただきました。私は今教師ですが、そんなことはできません。少なくともそんな時間がありません。そのようなことをしてくださった先生に感謝の気持ちでいっぱいです。この宿白先生は北京大学の終身教授で、考古学の終身教授はこの先生しかいません。とても厳しい先生ですが、私はそのとき、『旧唐書』・『新唐書』を自分で買って3回くらい全部読みました。これは、北京大学でした最もいい勉強でした。この勉強は、今までずっと、文献を読む際に役立っています。これは本当に宿白先生のおかげです。中国には悪いことがたくさんありますが、いいこともたくさんあります。その当時中国は「供与制」を実施しており、北京大学で2年間勉強する間、学費も家賃も電気代も必要ない、食事代だけ自分で負担する、そういう環境を与えられて、いい勉強ができました。

### 三、私の留學生活と研究生活——中日交流の考古学を志す——

#### 1. 同志社大学への留学——森浩一先生との出会い——

先ほども言いましたように、私は日本語を勉強して京都大学へ留学する予定でした。1年間くらいラジオで日本語を勉強して全国の試験を受けたところ合格しました。私の大学は同志社大学と姉妹校です。同志社大学には森浩一先生という有名な考古学研究者がいらっしゃいました。そういう理由で、私は森浩一先生のところへ留学しました。これは私の人生において日本での研究生活の出発点となりました。もし同志社大学の教育を受けなかったら、今日の私の活動は一切なかったと言えます。

今年森先生は80歳を迎えられ、今月の27日、傘寿のお祝いがあります。私は26日から30日までずっと東京におり、27日は、専修大学のシンポジウムと森先生の傘寿のお祝いとが重なってしまっています。ですから私は、東京のシンポジウムが終わると、そのまま新幹線に乗って京都に戻って森先生の傘寿のお祝いの会に出席し、そしてその翌日、また東京に戻って、講演会や研究・見学を行うことにしています。もし私が森先生の傘寿のお祝いに何かの理由で参加しなかったら、それは自分でも許せないことです。恩師の傘寿のお祝いはその日しかないのです。私は必ず参加しなければならない。それは学問というよりも人として大事なことです。

森先生のところで日本の考古学のいろいろなことを学びました。私が興味をもったのは古代の中日交流史でした。そこで、都城制に挑戦しました。中国の隋唐の長安城がどのくらい日本の平城京に影響しているかという問題で、これが私の修士論文のテーマです。それから私はもっと深くこの研究を続け、私の博士論文にもなりました。

## 2. 奈良教育大学三辻利一先生との共同研究「東アジア古代陶器の伝播・流通に関する研究」

考古学研究は、以前は器物を研究する際に、主に器形・紋様・銘文を検討するだけでしたが、今ではいろいろな分野の研究者による共同研究ができるようになりました。私は1990年に奈良教育大学の三辻先生と出会いましたが、三辻先生は実は考古科学・分析化学の研究者です。その時私は中国で出土した唐三彩や日本で出土した唐三彩の分析化学的研究をしたのですが、今では誰も驚きませんが、その当時周りの人たちは納得できませんでした。「王先生は考古学の研究者なのに、どうして化学のことをやられるのですか」と……。実は、考古学では目で見えるものだけが重視されますが、化学的分析を用いる方がもっといいと私は考えたのです。唐三彩は中国の洛陽や陝西省などが出土地として有名ですが、問題は、日本で出土したものです。これが洛陽の唐三彩なのか陝西省の唐三彩なのか、その成分によって産地がすぐに判断できます。私の新しい考え方と研究方法は、三辻先生からいろいろな分析化学の知識を吸収してできたのだと言えます。

## 3. 同志社大学客員研究員として博士論文「中日の古代都城と文物交流の研究」を作成

それから92年を迎えました。私は先ほど留学は86年から88年までの2年間だとお話しましたが、そのとき中国の大学では講師でしたけれども、こちらでは留学生として修士課程からスタートしました。その時34歳でしたから、修士号を取った時は36歳になっていました。実は1992年に森先生からお話があったとき、最初は、私を客員教授として招待したいと言われました。しかし、私はお断りしました。お断りしたと言うよりも、客員研究員にさせていただきたいと申し上げたのです。初め、森先生は納得なさいませんでした。皆さんご存知のように、客員教授の給料は大変いいのに対して客員研究員はその2分の1くらいです。「なぜ客員研究員がいいのか、客員教授はやらないのか」と森先生が言われるので、私は「せっかく森先生のところで研究するのだから、私の夢としては、博士の学位を取りたい」という希望を申し上げました。森先生は誰にも学位を出したことがありません。また、それまで同志社大学の文学部は外国人に博士の学位を出したことがなかったのです。一度、森先生から「あなたにできるのか」と聞かれました。私は「もし1年間毎日続けて論文を書いていけば、少なくとも30万字以上の長さの論文になりますが、私が努力すればできるはずです」とお答えしました。そういうことで、森先生が納得されるまで何回も相談して、最後に客員研究員として招待されました。そして、私はまる一年で博士論文の原稿をすべて書き終わって提出しました。

## 4. 富山大学で外国人研究者として授業「古代中日文化交流」を担当——氣賀澤保規先生との出会い——

日本の制度は厳しいですから、博士論文の審査に半年くらいかかります。私は1992年の9月に来て、93年の8月いっぱい論文を書き上げ、その審査の間に、今明治大学におられる氣賀澤先生のおかげで富山大学に外国人研究者として行くことができました。審査を待つ間、1コマの授業を担当しました。実は、半年くらいで私の論文審査が通っても、学位が出るまでもう半年待たなければならなかったのです。誰かの論文資料を無断コピーしていないか、勝手に写してはいないかなどをチェックされるのです。そして1994年の10月21日にやっと博士の学位を取りました。学位を取って3日後に私は帰国しました。そのとき中国の『人

民日報』が私のことについて報道しました。記事の見出しは「人民生産隊長から文学博士へ」でした。これも私の留学時代の思い出の一部です。

#### 5. 同志社大学で客員教授として授業「東アジアの考古学」「中日古代文化交流」「文化史学総合演習Ⅰ」「文化史学総合演習Ⅱ」を担当

学位をとってすぐに帰国しましたら、中国で多くの仕事が待っていました。私は今まで中国で三つの仕事を担当してきました。第一は西北大学文博学院で大学生と大学院生の考古学の授業を担当しなければなりません。第二は西北大学国際文化交流学院の副院長の仕事で、これは留学生の募集・教学管理と外国との交流に関する業務です。第三は、西北大学外国語学院日本学部の大学院生の授業を担当しています。

1998年に私は同志社大学の客員教授として招聘され、主に「東アジアの考古学」「中日古代文化交流」「文化史学総合演習Ⅰ」「文化史学総合演習Ⅱ」という授業を担当しました。客員教授の任期は1年間なのですが、1年間が終わった時点で学生さんの評価が高かったので、森先生からよければもう1年延長してほしいとの要請を受けました。それで私は計2年間客員教授を務めました。

#### 6. 京都大学で客員教授として研究「中国出土の漢簡研究」に従事——富谷至先生との出会い——

それから、私は2003年に京都大学人文科学研究所の客員教授として招聘されました。人文科学研究所の教授をなさっている富谷至先生から——この先生とは93年以来の友人です。彼はうちの大学に留学されたことがあります——よく「王先生、都合がいい時に私のところに来てください」と言われておりまして、2003年9月、私はよければ半年間行きたいと申しました。こうして私は京都大学人文科学研究所の客員教授として来日しました。京都大学では授業を担当せず、もっぱら研究しました。ここは研究するには最適の場所です。研究資料がとても多いからです。私は富谷先生の漢簡研究会に参加すると同時に、自分の研究も進めました。この半年間で乾陵陵寝制度について7万字以上の研究論文を書きました。この論文は、実際私が書いた論文では一番長い論文とも言えます。この論文は2005年の『東方學報』第77冊に発表されました。

#### 四、現在、国際日本文化研究センターで外国人研究者として共同研究「古代東アジア交流の総合的研究」を主宰

##### ——宇野隆夫先生との出会い——

この度の私の受入教授は宇野隆夫先生です。宇野先生とは、私が1993年富山大学に滞在していた時に知り合いになり、94年に中国に帰国した後もずっと連絡を取り合っていました。4年前、宇野先生が西安にいらっしゃったときに「王先生、ご都合がよろしければ、私の国際日本文化研究センターの外国人研究者として招聘したいと思います、一緒に共同研究をしませんか」とお誘いを受けました。それでこの度、私は宇野先生のお陰で日文研の外国人研究者として招聘されました。私が共同研究の研究代表者となり、先生は幹事となって後ろから私を支えてくださっています。年齢は私のほうが2歳年下ですが、宇野先生は本当に尊敬すべき先輩としての学兄だと思います。

以上、簡単でしたが、私の農村生活と研究生活の一部分をお話しました。

#### 五、現在の私の研究課題と研究方法

##### ——8世紀中日交流の実態——

##### 1. 井真成墓誌発見の経緯

次に、私の今の研究課題や研究方法を話させていたきたいと思います。今日は唐時代の日本人留学生、井真成<sup>せいしんせい</sup>という人物の墓誌発見の経緯を中心に、古代中日交流の実態についてお話しいたします。墓誌は普通二つの部分から成っています。上の部分は墓誌の蓋と呼び、黒い石です。下の部分は墓誌銘と呼ぶ以外に墓誌文とも言います。この墓誌は蓋の上に「贈尚衣奉御井府君墓誌之銘」という12字が陰刻されています。墓誌の蓋の「贈」の意味は後で説明します。まず「尚衣奉御」は官職名です。「尚衣奉御」は実際、「六尚」の中の一つです。「六尚」とは「尚食奉御」「尚薬奉御」「尚衣奉御」「尚舎奉御」「尚乘奉御」「尚輦奉御」を指しています。その中で最も重要なのは「尚食奉御」です。「尚食」とは、皇帝の食べるものを指しています。これは管理が大変厳しかったのです。料理を出す際に、皇帝が直接食べるわけではありません。二人の人が毒見をし、皇帝はそれをじっと見て、安心してそれから食べます。ですから「尚食奉御」の官職に就いた人は、言うまでもなく皇帝との関係がとても密接だということになります。二番目は「尚薬奉御」です。皇帝に何

か病気があれば医者に診てもらいましょう。この時もし薬ではなく毒を入れられたりすると、すぐに命を落としてしまいます。ですから、これは「尚食」と同じように厳しく管理されます。三番目は「尚衣奉御」です。井真成はこの身分でしたが、これは「従五位上」の身分です。中国語で言うと「従五品上」です。これは結構高い身分です。四番目は「尚舎奉御」です。この仕事は、皇帝が住むところを管理する官職です。五番目は「尚乗奉御」です。これは皇帝の車を管理する官職です。六番目は「尚輦奉御」です。これは言うまでもなく輿を管理する官職です。とにかく、これらの人たちの身分は結構高かったと思います。

なお、官職名の前に「贈」という文字を書きますと、生前にそのような官職に就いていなかった人に、亡くなった後で贈ったことを意味しています。これは墓主の身分を判断する重要なポイントになります。

この墓誌のもう一つの重要な点は、直接「国号日本」を陰刻されている墓誌文があるということです。西北大学歴史博物館副館長の賈麦明さんは、この墓誌を発見した第一人者です。賈麦明さんは私の先生のお子さんなので、小さいころから、私と親しい関係にあります。この墓誌は、蓋の上に12文字があり、墓誌銘に171文字があります。あわせて183文字があります。本当に賈麦明さんのお蔭で、この墓誌について私は今までに10万字以上の論文を書きました。ですから、私は講演するたびに賈麦明さんに感謝の気持ちを述べたいと思っています。

普通、考古学上の遺物は発掘によって出土するものですが、この井真成墓誌は、違法工事の際にショベルカーによって掘り出されたものなので、非常に乱暴に扱われた文物です。一番残念なことは、墓はすっかり破壊され、墓誌も一部分が破壊されているのです。ただ、その墓地の場所は今も大体わかりますので、私たちの西北大学考古発掘チームと陝西省考古学研究院考古発掘チームは共同で、阿倍仲麻呂や吉備真備など井真成以外の遣隋使・遣唐使の墓が同じところに埋められていないかどうか、何度もボーリング調査をしました。しかし、今のところはそこから他の墓が発見されたという情報は一切入っていません。もし新しい情報が入れば、すぐにお知らせいたします。

## 2. 墓誌における「贈尚衣奉御」の表記法

この墓誌はこのようにして発見されたので、墓誌銘の上縁の部分が破壊されており、文字はある程度わか

るものの、完全に見えない文字もあります。たとえば、9行目の「東」の字ですが、下の部分だけしか残っていません。私は、これだけについて考証する論文を書きました。その論文は、実際1万字以上の長さです。この欠字を考証するのは、そんなに簡単な問題ではありません。たくさん文献史料を読み、多くの墓誌の実物資料を見ることが非常に大切なことだと思います。今までに隋唐時代の墓誌が1万点以上見つかっています。ですから、井真成墓誌の研究は、この墓誌だけを見るのでは不十分で、たくさん史料を比較しながら研究していくのが最も重要です。

先ほどの墓誌の写真ですが、上の蓋は黒い石で、下の墓誌銘は白い石です。この墓誌は、セットとして違う石が使われています。なぜ違う石を使っているのでしょうか。私は次のように解釈しています。彼は開元22年、西暦734年に亡くなりました。その時36歳で、若くして突然亡くなりました。何も用意していませんから、急いで墓誌を作って埋めなければならなかったという可能性があります。さらに言えば、白い石に文字を陰刻すると文字が見にくいですが、墨や漆を使用すれば逆に文字が綺麗に見えます。ですから、今は墨や漆は見えませんが、当時はそういうふうに使っていた可能性があります。これは私の単なる推測ではなく、他に例があります。

また、井真成の墓誌の後ろにある空白について、つい最近、私は「大周故亡宮三品墓誌」という例を見つけました。これについて皆さんにご紹介します。これは「大周」という武則天（則天武后）の時代の墓誌です。唐王朝は李姓の政権ですから、「李唐」とも呼ばれています。武則天は皇帝になって王朝の名前を改めました。即ち、「大周」あるいは「武周」という国名に改名したばかりでなく、自ら18字の「則天造字」も造りました。ですから、この墓誌には「則天造字」という文字があります。これは故亡宮、三品の人の墓誌です。この人の身分は、先ほどの「従五位上」の井真成よりも少し上で、三品です。こちらの墓誌のサイズは47cmくらいで、井真成の墓誌はほぼ40cmくらいです。井真成の墓誌の方が少し小さいです。井真成の墓誌は研究すればするほどいろいろな問題が出てきます。例えば、今度見つかった墓誌の後ろの空白は7行分です。最も面白いのは、三つの例が見つかったことです。井真成は16行のうち4行分が空白です。突厥の少数民族の場合は3行分が空白です。これは、多分この人の身分が結構高いということと関係があるのか

も知れません。以前、賈先生が井真成墓誌の空白に邦訳した中国の文字を入れるという学説を提出しましたが、この解釈は多分間違っていると思います。8世紀の日本に独自の文字はありません。中国の文字をそのまま使っていますから、翻訳の必要はありません。ですから賈先生の学説は成り立ちにくいと思います。以上の三つの例から見て考えられるのは、業績があれば、墓誌に長い文章が書かれるけれども、業績がそれほどなければ、短い文章しか書かれない、だからこそ後ろに空白が残るということです。この「大周故亡宮三品墓誌」の墓主は武則天時代の人ですが、7行分の空白があります。ですから、業績はそれほどなかったのだろうと思われま

す。井真成の墓誌は3年前に出土したのですが、初めて公開する席に平山郁夫先生が出席されました。そのとき私のご案内しましたが、この先生のおかげで、西安で井真成の墓誌が見つかったという情報が専修大学の先生方に伝わり、早速矢野建一先生と土屋昌明先生がシンポジウムを開催する提案を西北大学へ持って来られました。それを受けて、私たち4人の西北大学の専門家は2005年の1月28日、29日に専修大学で開催された大きなシンポジウムに出席しました。その時、参加申込みをした人は2500人以上いましたが、会場の収容人員が1500人でしたので、参加者は抽選で決まりました。こんな大規模なシンポジウムは私にとっても初めてで、本当に感動しました。

井真成の墓誌の研究は今も盛んに行われています。なぜかという、いろいろな問題が解決されずに残っているからです。これらの問題を解決するため、さらに研究する必要があります。今年からさらに5年間、私と専修大学の間で東アジアの遣隋使・遣唐使についての共同研究をすることになっています。この27日にも第2回目のシンポジウムが開かれますが、ここで私は井真成に関する最新の研究成果を発表します。

### 3. 井真成と「贈尚衣奉御」の性格

先ほど、「贈尚衣奉御」の「贈」という字について、すこし紹介しました。即ち、官職名の前に「贈」という字があれば、生前にそのような官職に就いていなかった人に、亡くなった後で贈ったことを意味しています。これは墓主の身分を判断する重要なポイントです。しかし、日本の研究者は最初はこの「贈尚衣奉御」の「贈」の意味を知っていませんでした。

さらに井真成と「贈尚衣奉御」というものの性格に

ついて話したいと思います。この井真成という人は唐玄宗時代の人物です。唐玄宗の時代は、それ以前の「六尚」任用制度と比べてずいぶん変わりました。彼は712年から756年のあいだ皇帝の位にありました。それまでの皇帝は、普通、自分の息子を尚衣奉御にしましたが、唐玄宗の男児30人のなかで一人もこのような官職に就いたことがありません。逆に、皇后の妹婿の長孫昕という人が尚衣奉御になっています。その時代はこの官職の任用制度が非常に厳しく、普通の人ではできませんでした。中国人にとっても非常に厳しかったのですから、外国人にとってはもっと厳しかったのではないかと思います。しかし、唐王朝は非常に賢明・開放的な政策を採用する大国でしたから、外国人でも官職に就くことができました。日本を含む東アジアの国家の人だけではなく西アジアなどの国家の人でも官職に就いた例が『旧唐書』『新唐書』の中にはたくさん書いてあります。ですから、井真成の死後に「尚衣奉御」を贈ったことは特別なことではありません。

井真成は開元22年、西暦734年に36歳で亡くなりました。そうすると、生まれた年は699年ということになります。今、日本の研究者と中国の研究者の間で、井真成という人がいつ入唐したのかということが問題になっています。それには二つの説があります。第一の説は717年です。彼の生まれた699年から最も近い遣唐使は702年の第8回遣唐使ですが、このとき井真成は4歳です。遣唐使に加わるのは不可能です。次の第9回は717年です。717年だと、井真成は19歳です。19歳は立派な青年です。これは、遣唐使に随伴する留学生として最もふさわしい年齢だと思います。もちろん、井真成という人について中国の文献、日本の文献には一切書かれていませんが、私は、年齢から推測して717年、第9回遣唐使に随伴する留学生として入唐した可能性が最も高いと考えています。

しかし、何人かの中日の研究者が異なる説、733年に中国に渡ったのではないかという説を唱えています。専修大学の矢野先生や北京大学の榮新江教授など、数人の先生がこのような結論を出されましたが、私は2005年の『東アジアの古代文化』123号・124号に2号連続でこれに反論する論文を発表しました。その中で私はいくつかの反論の証拠を挙げました。第一の論拠は年齢に関するものです。私はすべての遣唐使に随伴した留学生の年齢を調べました。その年齢は、普通は16歳から20歳までです。22歳の人でも僅かにいます

が、25歳の人ほとんどいません。もし井真成が733年に留学生として入唐したとしたら、彼は35歳です。35歳で留学生として入唐するのはおそらく不可能でしょう。第二の論拠は長安到着から死亡までの時間の長さに関するものです。もし733年に入唐したとしたら、同年3月に大阪の難波を出発して、8月ごろ揚州というところに到着します。今は飛行機や電車などが通っていますが、昔はそんな便利なものはありません。揚州から長安へ行くためには歩かなければならないので、少なくとも3ヶ月はかかります。8月に出発して、長安には11月の末、あるいは12月の初めごろに到着します。ところが井真成は734年2月8日に亡くなっています。つまり、長安到着後2ヶ月くらいで亡くなった井真成に、なぜ唐玄宗は高い身分を与えたのか説明できません。やはり、井真成に業績があったからこそ唐玄宗は高い身分を与えたというのが自然な考え方ではないでしょうか。逆に言えば、唐に入ってからすぐに任官するという制度はありません。今でも同じことですが、入国してすぐ亡くなった人に高い身分を与えることはあり得ないと思います。そんなに短い間では皇帝との関係を築くことは困難です。ですから、井真成は733年に入唐したのではなく、717年に第9回遣唐使に随行した留学生として入唐したのではないかと、これが私の結論です。

#### 4. 井真成という中国風の姓名

次に井真成という名前のお話をします。この問題は中日両国における研究の焦点となっています。現在は主に三つの説があります。第一の説は、國學院大学の鈴木靖民先生の「井上」説です。すなわち、もともと井上という苗字であったのを、「上」を取って中国の名前に従って一つの字「井」だけ残して井真成と改名した、というのが鈴木先生の説です。第二の説は、奈良大学の東野治之先生の「藤井(葛井)」説です。「フジ」という漢字には二つの書き方がありますが、発音は同じです。東野先生の推測によりますと、「葛井」というところは今の大阪の南の藤井寺市にあたります。ですから、この学説が提出されてから藤井寺市の地元の人々は喜んでます。すぐに「井真成市民研究会」を立ち上げ、神社にいろいろなことを書いて——井真成に対して早く帰国してくださいとか——、墓誌の複製品を造って神社に置いて、井真成のふるさとだと宣伝しています。

私は、それほど簡単に推測できるものではないと考

えています。問題は第一の説、第二の説には今まで証拠が無いということです。例えば他の人が井上から省略して「井<sup>せいきゆうたい</sup>倭替」という名前になったという例はありません。私は、この墓誌を見てから、『旧唐書』『新唐書』などの書物を調べて、遣唐使の改名に関する文献記録を探しました。換言すれば、文献の記録があれば証拠になります。記録がなければ推測に過ぎないということです。また、考古学の立場から言えば、ある程度の推測は認められますが、すべて推測というのは学問ではありません。幸いなことに、私は重要な文献記録を見つけました。これは『旧唐書』の「東夷列伝」の中の、阿倍仲麻呂に関する記述です。阿倍仲麻呂は中国の風を慕って、帰国せずずっと残っていました。「姓名を改めて朝衡と為す」と書かれています。これは『旧唐書』『新唐書』の中で最も重要な史料だと私は思います。私はこの史料に基づいて井真成の元の名前を検討していますが、今はわかりません。多分、阿倍仲麻呂と同じように、唐に入ってから自ら改名したという可能性が高いと思います。「阿倍仲麻呂」と「朝衡」、その読み方はずいぶん違います。「阿倍仲麻呂」という漢字の中に「朝衡」という文字や似ている文字は含まれていません。ですから、井真成という中国名と彼の元々の日本名との間には一切関係がなさそうです。

昨年、私は「唐日本留学生井真成改名新証」という論文を書きました。「改名新証」というのは、改名に関する新しい証拠が見つかったという意味です。今までに、「井」姓の遣唐使者は井真成の他にもう一人、という人物が存在したことがわかりました。この人のことは、円仁の『入唐求法巡礼行記』の中に詳しく書かれています。838年に下痢のため揚州で死亡した、第19回遣唐使船の船師佐伯金成の僱従（助手に相当する）でした。ここで注目すべきは、井真成と井倭替は何れも遣唐使者であったことです。私の推測が間違っていなければ、二人の改名は、たぶん阿倍仲麻呂の状況と同じように、入唐してから、唐の名風を慕って、自ら改名したのであって、元の日本名とは関係がないように思います。さらに言えば、井真成は734年に亡くなり、井倭替は838年に死去しているので、両者の間には105年近くの差があります。両者には親戚関係があるかどうかは別として、最も重要なのは、何れも遣唐使者であったことが一番無視できないポイントだと言えます。

## 5. 国号「日本」の確立年代

「日本」という国号についてですが、井真成の墓誌の中でそのような言葉が初めて出てきました。この墓誌は、中国で初めて見つかったものだというだけではなく、出土物の中で日本の国号が使われた最も古い例でもあります。ですから、この墓誌は小さくて40cmほどしかありませんが、価値は大変高いものです。この井真成の墓誌を手がかりとして遣隋使・遣唐使について深く研究する必要があります。この時代の中国を記した最も信用の高い歴史書である劉昫撰の『旧唐書』では、倭から日本に国号が変わったのは670年であるとされています。実物として出土した物では734年ですから、文献のほうが少し早いです。

中国の文献の中で最も古いのはこの670年ですが、最近、高句麗の僧道顛が書いた『日本世紀』の中に日本の国号が出てくることに気づきました。これは年代から言うと669年です。ですから、「日本」という国号が使われ始めたのは、おそらく670年前後だと考えられます。しかしながら、日本の律令などは、すべて701年から始まっています。中国の文献がほしい670年、朝鮮の文献も669年ですから、中国の文献や朝鮮の文献のほうが少し早いです。11月13日に山形大学人文学部による「東アジアのなかの遣唐使——新発見の井真成墓誌から見た国際交流——」という国際学術講演会が開催されます。私も東洋大学の高橋継男先生と一緒に出席する予定ですが、その時に「日本」の国号について深く討論しようと考えています。

## 6. 人名から読み取れる歴史背景

3年前に京都大学に客員教授として滞在していた時、私は2人の先生に案内していただいて、岡山県の圀勝寺を見学したことがあります。皆さんは圀勝寺の名前の由来をご存知ですか。「圀勝寺」というお寺は、吉備真備の父「下道圀勝」の名前と密接な関係があると考えられています。「圀」という字は、実は武則天（後の則天武后）が造った文字です。武則天が皇帝に

なっただけでなく「唐」を革命し、国号を改め「周」としたばかりでなく、皇帝に在位した694年から705年の間に自分の意志を表す18個の文字も造りました。それらは「則天造字」と呼ばれています。この「圀」は、そのうちの一つです。1997年、上田正昭先生が一冊の論文集を作られる際、私を執筆者に誘ってくださいました。その際に私は武則天の造った文字について論文を書きました。皆さん興味がおありでしたら、参考資料のところに書いてありますのでご覧ください。「圀」という字は四面のなかに「八方」が入っている形をしています。「八方」という形は、東西南北の四方にさらに四方が重なり「米」の字のようになって「八方」となります。ですから、「圀」という字の意味は世界・天下という意味を表します。世界・天下を統一するという皇帝の意志が込められています。このように、文字から年代はすぐ分かります。これらの「則天造字」は彼女が705年に亡くなると、一切使われなくなります。

吉備真備の父に話を戻しますが、大変興味深いことに、父「圀勝」とその弟「圀依」の名前の中に「圀」という「則天造字」が入っています。この兄弟のうち少なくとも一人あるいは二人ともに則天武后の時代の「周」に行ったはずですが、私の研究によれば、おそらく702年の遣唐使として「周」に行った可能性が一番高いと思います。もし則天武后の時代の「周」に行かなかったのなら、元の「國勝」と「國依」という名前を「圀勝」と「圀依」に改める必要は絶対になかっただろうと思います。吉備真備はこのような環境下で小さい時から家庭で（漢学の）教育を受けており、それ故に、早くに遣唐使として唐に行ったのではないかと考えられます。このように「圀」という僅か一つの文字を通じて、古代の中日交流の歴史背景が浮かび上がってきます。

今日は時間の都合でここまでにします。ご静聴ありがとうございました。